

情報社会論

2018年度 後期

米中貿易戦争から

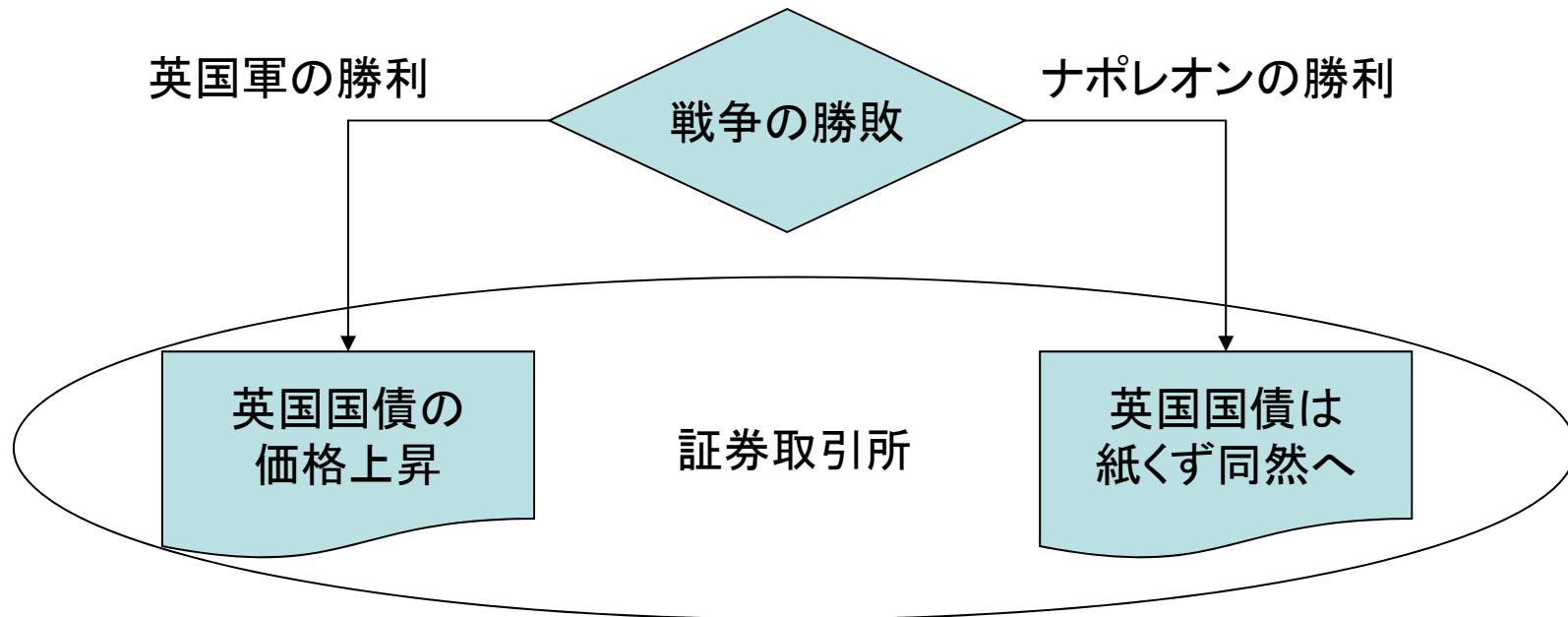
- かつて、日米貿易摩擦があった。歴史に学ぶことは有益。
- 米国と欧州との関係は。
- 日本経済にどのような影響があるか。
 - 円は高くなるか低くなるか
 - 日本とアメリカの貿易関係はどうなるか
 - TPP11に与える影響は
- 今後の世界経済にどのような影響があるか。
- 情報社会の観点はどこにある？

情報社会論－不確実性と情報－

- NASAによると、2011年、ある人工衛星が燃え尽きず地上に落下して人にあたる確率が3200分の1とのことで話題になった。→
 - ✓ 高いと思いますか、低いと思いますか？
 - ✓ この手の「情報」は、事実であっても解釈を間違うと、とんでもない結論となります。この場合、「宝くじが当たる確率(たとえば200万分の1)よりも高い！」とか。本当にそうでしょうか？
 - ✓ このニュースと同じ表現で、宝くじの当たりを表現すると、「今年の年末ジャンボで誰かに1等賞が当たる確率は、1(つまり100%)」です。
 - ✓ 人工衛星は数十億人のうち誰かに当たる確率を言っているにすぎないのです。

歴史に見る“不確実性”の例

- ワーテルローで天下分け目の戦い
→ ナポレオン(仏) VS ウェリントン(英)
- ロンドンの証券取引所も戦場
→ ネイサン・ロスチャイルド VS 英国資本



ワーテルローの戦い



ウェリントン卿



ナポレオン

Nathan M. Rothschild (1777-1836)



- オーストリア出身のユダヤ系資本家一家の三男で、英国での足場作りのため送り込まれる。
- “ワーテルローの戦いの真の勝者”とも言われる。

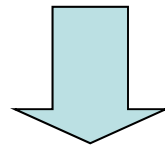
1815年当時の“情報伝達手段”

- インターネット、テレビ、ラジオ、電話、電報 etc.・・・勿論すべて無し。
- 当時の新聞の情報は全く信用が無かった。
- 情報は、馬車や早馬、快速船によって人の手によって運ばれた。

オーストリア出身のロスチャイルドは、英国から見れば外国の資本家であったが、特に情報収集力では当時すでに一目置かれる存在であった。

投資家たちの情報員の行動

- ロスチャイルド以外の投資家たちの情報員は前哨戦でナポレオン有利の戦況を見て、戦場を離れた。
- ロスチャイルドの情報員は最後まで残り、ウェリントン軍に援軍が到着するのを確認して戦場を後にした。



この戦況判断の違いが投資家同士の戦いの勝敗を決することになる。

ネイサン・ロスチャイルドの行動

- 快速船で到着した情報員から“英国軍に援軍”の情報を得る。→英国勝利と判断。
- ロンドンの証券取引所に向かい、柱に寄りかかり、失望したような表情で部下に英国債の“売り”を指示。→なぜ？英国勝利なら“買い”では？
- 他の投資家たちは皆“あのロスチャイルドが売りに出た”ことに衝撃を受け、英国の敗戦を確信（実は誤った判断）→皆が売りに出すことで英国債は大暴落。
- 相場が閉まる寸前、紙くず同然まで値下がりの英国債を買い占めた者があった。
→ネイサンロスチャイルドその人であった。

それ以前とそれ以後の世界 情報と戦略

- 圧倒的なロスチャイルド財閥の成立と英国貴族を中心とする旧英国資本の壊滅。
→現在の対テロ戦争に繋がる歴史の流れ。なぜか？
- 完勝でなければ、ロスチャイルドは微妙な立場となる
→ゲーム理論のしっぺ返し戦略。最終ゲームがいつなのか分かる者(これも情報！)だけが裏切り戦略を最後に仕掛け、勝ち逃げ。

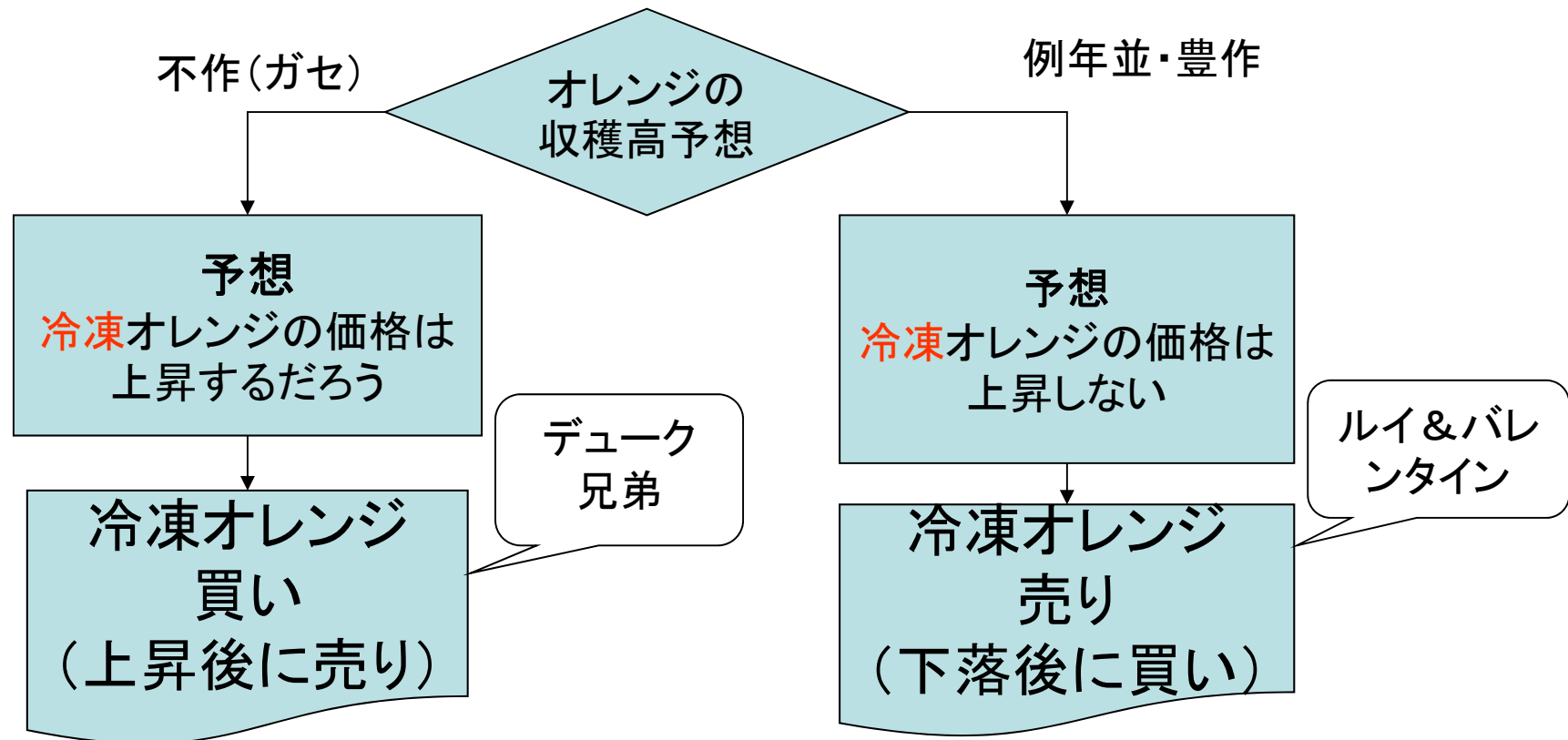
ゲーム理論という経済学の理論がある。経営など人間行動をゲームに見立て、情報を基にゲーム参加者(プレイヤー)のとるべき戦略を数学的に解明する手法。

大逆転 (Trading Places)

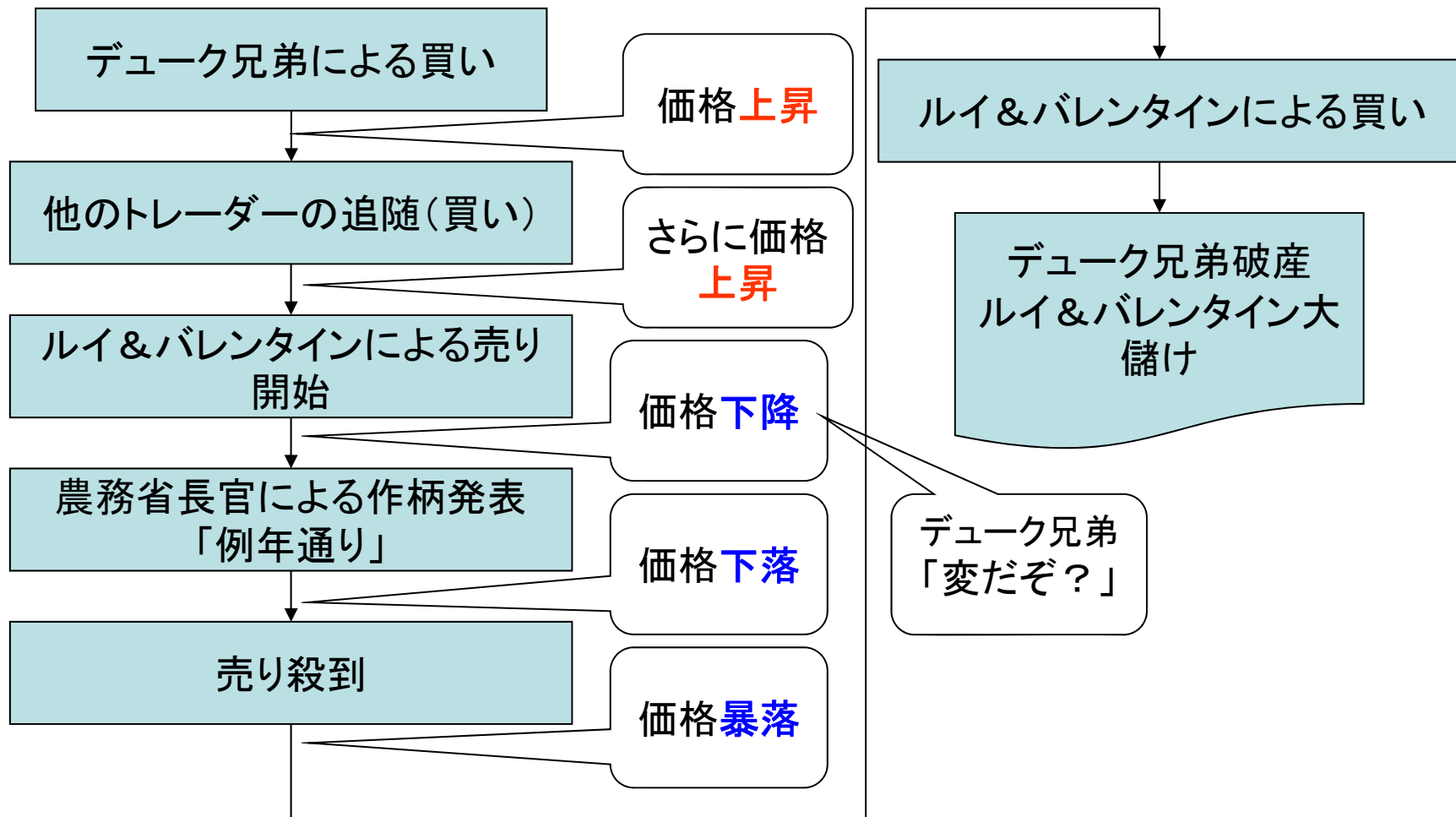


映画Trading Placesに見る先物取引所

- 安く買って高く売る → ○
- 高く売って安く買う → ○



映画Trading Placesの流れ



情報から利益を引き出すこと

- 情報は**早い**だけではだめで、**正確**でなければならない。
- 市場が、特定の情報に対してどのように反応するか、**市場システムについての理解**が重要。
- **自分の置かれた状況**を正確に判断する。
- ✓ 不正に得られる情報ではなく、努力や才覚によって得られる情報でなければならない。
- ✓ 違法でなくても、倫理に反してはならない。
 - ネイサン・ロスチャイルドや大逆転の登場人物たちのとった行動に問題はないか。
 - 2005年12月のジェイコム株誤発注事件でいち早く察知し巨利を得た個人トレーダーの行為は「正しい」か。(行為自体は違法ではない。)

“不確実性”があるところにチャンスが存在する。“情報”が多くの人に行き渡れば行き渡るだけ、チャンスは小さくなる。不確実なままでの行動はばくちと同様であるが、情報が自分だけにあれば、市場から確実に利益を得ることができる。ただし、優位な立場から得られる情報の利用については、インサイダー取引など、多くの場合**違法**とされている。→村上ファンド事件、日経社員によるインサイダー取引事件2006年

いきなりですが、現代の話・・・

－立合も今は昔－

- コンピュータ取引が主流となり、廃止されつつある。
- 立地ゼロへの競争
- 現代の高速化した情報流通からすると、これまで見てきたような情報をめぐる争いは、牧歌的に見えます。
- それに加えて、情報の洪水(ビッグデータ)が現代社会を考えるうえで避けて通れません。

情報分析力(才覚)

- 情報は“ある株式の価格が1年間で2倍になる”とか、“ある商品が実はレアで10倍の価値がある”とかいう形ではもたらされない。→ほとんど違法情報か詐欺。
- 本当の情報は“ある会社が投資をしたとか、誰が社長になったとか、ライバル企業が投資をしたとか”の形で皆に平等にもたらされる。その情報が、どのような形で生かせるか、“分析する力”を持つことが重要である。

現代は情報社会

- インターネット利用環境の普及と利用技術の向上
- 様々な情報サービス
 - 無料の情報検索サービス(ニュース、株価、辞書etc.)
 - 掲示板情報
 - 電子商取引(B to B, B to C, C to C)
 - 通販と検索システム(個人情報^の蓄積)
 - 新しい通信システム(携帯電話、IP電話)
- 情報量の増加とともに埋もれる情報
 - 情報分析力とともに情報選択眼が重要
→ノイズ情報に惑わされず良質な情報を選ぶ
- コンプライアンスの重要性
 - 知らなかったでは済まされない。→教育の必要性
 - 「違法でなければ何をやってもよい」は通用しない。
 - 健全な社会の発展は個々人が情報社会の市民として成長することが必須。